

vol.47

# 歴史と物語

文 島田 雅彦

text by Masahiko Shimada

歴史家と小説家の歴史への向きあい方の最大の違いは、歴史家は歴史にIfを持ち込みたがらないが、小説家は積極的にIfを持ち込んで思考実験をするのが大好きだ。歴史家は「今ある結果を変えることはできない」と考え、小説家は往生際悪く、「条件を変えれば、違う結果になる」といいたくなる。そのせいで、歴史改変小説というジャンルが成立することになる。たとえば、第二次世界大戦でナチス・ドイツと大日本帝国が勝利を収め、アメリカの東側をドイツが、西海岸を日本が占領しているというパラレルワールドを描いたフィリップ・K・ディックの『高い城の男』などがその代表である。

歴史と物語は表裏一体であることは、Historyの中にStoryが入っていることからわかる。古代ギリシャでは神話から英雄叙事詩が生まれ、またヘロドトスの『歴史』が書かれたが、物語文学と歴史は、神話に対する批評という点においては出自が同じである。さらに二百年後にアリスト

テレスが『詩学』を書き、叙事詩でも歴史でも数学の証明でもストーリーの構成が重要だと説いたのだった。ある程度、物語として流通しなければ、歴史は人々に共有されない。歴史小説や大河ドラマが歴史の大衆化に果たした役割は大きい。

しかし、わかりやすい物語、感動を呼ぶ物語の裏側には無数の残酷物語、記録にも記憶にも残らなかった人々の物語があったはずで、それをどれだけ掘すくり上げることができるかが、個々の歴史家や物語作者に問われる。

たとえば、「日本史」は通例、日本や日本人を主人公にした物語になるが、そこには必ず中国や中国人、ヨーロッパやアメリカ、朝鮮半島とその地域の人々が主人公となる物語が複雑に絡んで来る。読者も書き手も複数の他者の物語にコミットしながら、歴史的事象を別の角度から検証しようとする。中心人物ばかり見ている限り、対話は成立せず、「日本すげえ」ばりの自己栄光化ばかりが幅を効かすことになる。歴史も物語もどれだけ多くの他者の物語に耳を傾けられるにかかっており、そこには死者の物語も含まれる。声なき者の声を無視するような歴史も物語など何ほどの意味も持たないのだ。

## Profile

1961年東京生まれ。1984年東京外国語大学ロシア語学科卒。在学中の1983年『優しいサヨクのための嬉遊曲』でデビュー。主な作品に『自由死刑』、『退廃姉妹』（伊藤整文学賞）、『悪貨』、『虚人の星』（毎日出版文化賞）、『君が異端だった頃』（読売文学賞）ほか多数。『忠臣蔵』、『Jr. バタフライ』のオペラ台本もある。芥川賞選考委員。法政大学国際文化学部教授